No.121
公民館だより
平成16年6月
宮津市字由良
由良の里センター内
由良地区公民館

まちづくり人づくり

由良地区公民館長　飯澤登志朗

六月は「まちづくり月間」です。これは国土交通省が毎年六月に実施し今年は二十二回目を迎えます。

今年のテーマは「環境まちづくり」です。

地方分権や市町村合併が進むなか、住む人が主役となってのまちづくりが重要です。

私たちの住む由良地区の環境は如何でしょうか。

浜野路の府道丹後由良停車場線（四方医院～由良駅間）がきれいになりました。電柱を移転し側溝を整備して安全で快適な道路環境をと、京都府が施工したものですが、住む人達の理解協力があったからできた工事であり、一人でもエゴをだすと出来ないことで関係者のご努力に頭の下がる思いです。

しかし、公共下水道整備等まだ進展が見られない問題があります。

最近、浄化槽を設置する家庭が増加していますが浄化された汚水を河川に流すことに拒絶反応をしている地区もあり、由良地区の足並みは揃っていないようです。

新聞に、魅力ある地域づくりには快適な環境が不可欠、下水道がなければ地域の活力も生まれない。こんな記事とともに都道府県の全人口に対して、下水道の利用できる人口割合が載っていました。

京都府は全国五番目の高い割合ですが全国平均65・2％を下回っている県が36県もあります。

宮津市の場合、現在公共下水道工事が進められていますが、利用割合は29％と低く、清潔で快適なくらしにはほど遠い状況です。

将来、由良地区では農業集落排水の手法が有力視されています。決定するまでには終末処理等問題は山積みだと思いますが、行政当局と共に住む人々が中心となって一日も早い施工を望んでいます。

次に宮津市の平成16年度主な事業に「子どもがのびのびと育つまちづくりプラン」があります。

家庭でのしつけや教育を第一義に、社会全体で子育てを担う取組みを進めていこうとするものです。

毎日のように子どもへの虐待が報じられる昨今、由良地区では現在のところ虐待や非行問題は起きていないようですが子どもが育つ良好な環境を守り続けていかなければなりません。

「13歳のハローワーク」作、村上龍が話題を集めています。

《いい学校を出ていい会社に入れば安心》という時代ではない、好きでしょうがないことを職業にと五百種余りの職業を紹介していますが、何故かその五百種余の職業に農業がありません。

食糧自給率が低下しているなかで、生産調整や食生活の変化があり米づくりも厳しい状況にありますが、こんなところにも後継者難の問題が影響していると思われてなりません。

今年は宮津市制50周年記念特別事業として、わがまちみやづ満喫ウオークに取組みます。

みかんの実る由良路を満喫していただく為には由良あいさつ運動の趣旨を活かしてください。

◎あいさつが飛びかう町に
明るい未来。

平成十六年度 由良地区公民館役員名簿（順不同・敬称略）

主事　枝川隆亮

【運営審議会委員】

由良小学校長　倉野英明
由良自治連合会長　足立明
脇自治会長　北野宏
宮本自治会長　枡田益一
浜野路自治会長　糸井治孝
港自治会長　山田昭夫
下石浦自治会長　枡田九兵衛
上石浦自治会長　野村孝行
市議会議員　大森秀朗
前公民館長　酒田治
学識経験者　四方寿朗
由良幼小学校PTA会長　大森賢司
栗田中学校PTA会長　由利昭弘
由良婦人会長　塩森啓子
松寿会会長　山口幸一
由良子供会連絡協議会会長　千坂幸雄

【公民館役員】

公民館長　飯澤登志朗
主事　枝川隆亮

【分館長】

脇分館長　松林富次雄
宮本分館長　竹田茂
浜野路分館長　有本敬
港分館長　山田訓久
下石浦分館長　野村一雄
上石浦分館長　岸田秀樹

【幹事】

（文化部）部長　中西衛
副部長　森本順子
松本弘・亀井正一
舛井満夫・岸田国彦
中西正直・田中順子
中西達也・市場正治
野村和之・山下正貴
塩森啓子・東野敏子

（体育部）部長　浜崎利雄
副部長　中西一就
副部長　西之上昌代
岡本康一・有田吉尚
小西衛・吉元誠司
由利晶子・千坂幸雄
大森智朗・大森美和
中西利一・千坂千恵子
枡田衛・山下明美
野村雄治・岸田孝子
松林朋子・川崎智子

（体育部講師）森田美砂子

平成十六年度事業計画

（文化部）

○盆踊り大会（地蔵盆）　八月二十二日
○文化祭（婦人会協賛）　十一月三日
○四部対抗囲碁大会　一月十六日
○自治学級　二月十三日
○人権学習会・生涯学習会講演会（婦人会共催）　二月二十日
○公民館だより発刊　年三回
○由良歴史年表編纂事業　周年

（体育部）

○由良岳登山（第三十八回）　四月二十九日
○第十六回宮津市地区対抗駅伝競走大会（南部コース）　六月六日
○四部対抗バレーボール大会　六月十三日
○四部対抗球技大会（ソフトボール）　八月十四日
○市政五十周年記念事業「わがまちみやづ満喫ウォーク」（安寿コース）　十月二十四日
○子どものびのび体験活動（子供会連絡協議会共催）
○京都府・土曜子ども活動支援事業
京の伝統工芸品教育活用推進事業を利用
子どもに本物の伝統工芸品に触れる機会を与え製作体験を実習させる。（八月～九月実施）
○子ども料理教室（十一月～十二月中実施）

行事報告

主事　枝川隆亮

◎二月八日　自治学級

由良自治連合会長北野誠治氏及び宮津市議会議員大森秀朗氏を講師として開催しました。

北野自治連合会長から

一、下水道処理について
二、農道、市道改修等について
三、幼稚園舎の改築について
四、JA、JR跡地活用について
五、農業後継者問題、水田有効利用等について
六、その他宮津市や京都府へ要望している事項について

大森市議会議員から

一、合併問題の進捗状況について
二、京都縦貫道の開通について
三、新型肺炎（サーズ）による観光面の影響について
四、高額医療費の扱いについて
五、下水処理について
六、松枯れの対処について
七、由良地域のプラン作り
八、その他宮津市の動き等

以上について細部に亘り説明がありその後意見交換、質疑応答があり散会しました。

◎二月二十二日(日)　人権学習会

本年は毎日、TV・新聞等で報道されている「子どもの非行問題」に焦点をあて、宮津与謝防犯推進委員・保護司　佐々木耕照先生に「子どもの非行と虐待について」の演題で講演をしていただきました。

以下、内容の概略を報告します。

一、少年犯罪の背景
二、保護観察のしくみ
三、少年法の解説
四、児童の虐待について

●少年の健全な育成を期するため(厚生させていく)には少ず少年個人の人権を守る必要がある。

●親（特に母親）の子どもに対する深い愛情が必要である。

今後、子どもへの対応の仕方は先ず「子どもの人権を守る(考える)」から入っていく事が大切であると講演されました。

◎四月二十九日(木)　由良岳登山

手軽に身近な自然に触れてもらおうと昭和四十一年から始まった「みどりの日」恒例の由良岳登山は、今年で三十八回目を迎えました。

由良岳は頂上から舞鶴大浦半島・天橋立松並木の眺望があり丹後の明峰として、京都府を始め近畿地方の人気のある山として有名です。

六〇〇m余の低山でも急斜面の連続があり、各大学山岳部の新人教育の場として利用されています。

登山者により楽しく快適に過ごしてもらう為、昨年度末に合目標識・案内板の設置を公民館事業として取り組みました。

天気を心配していましたが、絶好の晴天に恵まれ、今年も枡本清さんのストレッチ体操で体をほぐしたあと頂上をめざしました。

登山者の方々にこぶし・モクレンなど満開の新緑あふれる由良岳山麓を満喫していただくことが出来ました。

登山時の辛さは、頂上からの三六〇度のパノラマですっかり疲れが取れました。

遠方からは、愛知県豊田市在住・佐藤ご夫妻の参加があり、最年少登山者は浜野路濱野颯人(はまのはやと)さん四歳でした。

自然は最高、山に登る楽しさを実感し、健康で過ごせることに感謝しました。

優しさの花を咲かせたい

栗田中学校長　檀野一義

今日学校に嬉しい知らせが届いた。小倉有加さんを救う会からの「手術は大成功」のＦＡＸである。早速、印刷して全校生徒に配布し、記載されている内容を紹介した。生徒には「よかったなぁ」という喜びの表情が広がった。一日も早く回復して、私たちの前に元気な姿を見せてくれることを心より願っています。

最近、いろんな場所で有加さんのことや「救う会」の募金活動がよく話題になります。その中で「地域の皆さんの温かい心」が話に出てきます。温かい心がいっぱいの地域だからこそ、大きな成果を上げることができたのではないかと私自身勝手に思っています。会事務局の皆さんやボランティアの皆さんの努力が大きかったことはもちろんのことですが……。

何回か、会合等に参加させていただく中で、公民館やＰＴＡなど社会教育活動が積極的にしかも豊かな内容で実施されていることを知りました。当地方のことをまだほとんど知らない私でも、節々で地域住民の皆さんの「温かい心」を感じています。

日本ＰＴＡでは、四年前から「やっぱり家族っていいな。」のテーマで「家族の風景三行詩と写真大募集」コンテストが開催されています。昨年度の入賞作品を数点紹介します。

栗山絵梨（茨城・小六）
夜遅く帰ってくる父
冷たいご飯もおいしそうに食べ
そんな父を見ている

松井かのこ（愛知・小六）
「おかえり」の声を聞きたくて
ランドセルと一緒に走って帰る
「ただいま」

佐々木亜利紗（秋田・中一）
幼い時ブランコに乗っている私
の背中を押してくれた
今は私がどんどん前に進めるよ
うに
かげで優しく背中を押してくれ
る

安藤史織（東京・中二）
許してくれると知っているから
最近少し　反抗期

中川明彦（北九州・十六）
おばあちゃん、ぼくの事　おじ
いちゃんとまちがえてもいいよ
おばあちゃん、ぼくの事、わす
れてしまってもいいよ
おばあちゃん、でもぼくはわす
れないよ
今までたくさん　ありがとう

入江いづみ（広島・三十九）
かぜをひいてしまった。
お兄ちゃんが　まあるくって
でっかい　おにぎりを作ってく
れた。
いろんな味がして、やさしさが
いっぱいつまっていた。
こころがとても　あたたかくな
たよ。ありがとう。

この入賞作品と同じような心や出来事が、いっぱい残っているように思います。家庭だけでなく地域全体にこの「温かい心」や「優しい心」が満ちているように思います。日々の日常生活では、大人も子どもも意識することはほとんどないでしょうが、子どもたちは、こういった心を空気のように自然と吸い取っていってくれているのではないかと思います。家庭や地域の教育力の低下が言われる中で、今一度、私たちの住む町の良さを見つめ直し実践したいものだと思います。

旅先で思ったこと

由良小学校長　倉野英明

今年のゴールデンウィークは、土、日が繋がり、五連休といった長い休みになったため、新緑の季節、久しぶりに妻と山陰方面に旅行に出かけました。

最近は、お互いの予定がなかなか合わないのと、子どもが大きくなって家族で出かけることが少なくなり、夫婦で出かけることもあまりなかったのですが、妻が前から機会があれば一度訪れてみたいと思っていた所に、さほど気乗りしなかったのですが行くことになりました。

九号線を通って鳥取、米子を過ぎ、松江に着き、松江城や小泉八雲宅、武家屋敷跡などを見学し、夕方、今日の宿、玉造温泉に着きました。温泉で疲れを癒したり、夜、外に出て足湯に入ったりと温泉情緒を味わい、ゆったりした気分で過ごし、次の朝、朝風呂に行こうとドアーに手をかけ下を見ると朝刊が置いてありました。さすがホテルはちがうなと思いながら、地方新聞を読んでいると、そこに次の記事が載っていました。オピニオン山陰という欄に、京都大学の福井教授の寄稿による、

大人になること……教育の原点とはという題の文でした。

文化人類学が専門の先生でアフリカに学問の研究によく出かけ、そこで次のような光景や状況を目の当たりにすることでした。それは、貧弱な物質文化、あるいは貧困にしか見えない無文字社会に生活する子どもたちが、やがて誇り高い大人になっていくということやある集落を訪れたとき、そこの子どもたちが自分をテストする。

ブッシュの灌木を指して、

「その木の名前は。」

とか、

「放牧中の牛の色や模様は。」

と尋ねる。的確に答えると、さすがという表情をするが、間違えると、まだまだ未熟というような顔をするらしいです。

大変厳しい環境の中で生活する子どもたちは、親の手伝いと言った簡単なことではなく、家族の一員としての仕事を任されており、女の子は、水くみや薪集め、男の子は、家畜の放牧や父親と連れだっての狩り等を行う。そうした過程の中で自然界のさまざまなものとの出合い、十五、六才でほぼ大人と同じように色や、模様を通じた自然観を習得していく。

彼らの社会では、大人になるということは、大人と同じような「もののとらえ方」を身につけることであり、それを習得しない限り、大人としてのつきあいには入れてもらえないという厳しい掟があるらしい。

ひるがえって、日本の現状をみてみると、あいさつがまともにできない新入社員。集団生活に必要な協調性や協働意識、自己規制や規律の欠如、人間関係がとり結べない。「ピーターパン症候群」や「ひきこもり」といった大人にならない、なりたくないといった若者が増えてきていると言われています。

教育に従事するものとして、どうしてそうなってきたのかと考えることがよくあります。今日の政治や社会情勢、就職難に表される就労状況や先の見えにくい閉塞感等々確かに展望がもてにくい状況になっているとは思いますが、それだけのせいにするのではなく、昨今よく言われるもう一度、学校、家庭、地域社会のあるべき役割を見直していく必要があると思います。

学校に課せられた第一の使命は、世の中に生きて働く確かな

学力をつけることにありますが、それと共に社会生活を送る上でのルールやマナー、公徳心等々を教育活動で培っていきたいと思います。

今、まさしく言われている、家庭教育や地域の中での子育てで大人たちがまず身を持って手本となる行動を示し、教えていくことにより、人間社会におけるもっとも基本的な「大人になる」ことができるのではないかと思います。

出雲大社や石見銀山の鉱山跡を巡り、旅の目的地である小京都津和野に着き、由良の地となじみのある明治の文豪「森鴎外」の記念館を見学し終え、その隣にある生家に入ったのは、夕暮れ時でした。そこで縁側に腰をおろし、「大人になる」ことの意味を回想していました。

中学生に対する想い

栗田中学校ＰＴＡ会長　由利昭弘

栗田中学校は今年度新一年生三十八名を迎えて一二〇名の新しいスタートとなりました。私も約三十年前には栗田中学校の生徒であったことを思い出し月日の経過が早いことをつくづく感じております。

当時の中学校は、一学年三クラスあり全校生徒は二百五十名程度の在籍であったように記憶しています。現在の生徒数を考えると信じられないほどの多さで今更ながら驚いています。由良小学校の仲間がほぼ全員栗田中学校に入学しますが、由良だけの世界から栗田へと広がり、栗田の生徒との出会いがすごく新鮮であり、隣の地区にもかかわらず新しい世界へ踏み出したような大きな出会いを感じました。この中学校時代の勉強、友人関係、クラブ活動などからのさまざまな教訓が大人になっていく上での基礎となり、現在の人格形成にも大きな影響を与えていると考え大変重要な位置づけにあると思います。

栗田中学校の学校教育目標は、「豊かな心と健康な体、確かな学力を身につけた生徒の育成」を教育方針として行われています。学力社会となって久しい中、豊かな心を持つ教育を真剣に行っていかなければならない現在と、毎日時間を忘れて遊び回り、自然の中で身についていた頃の教育との違いが親として教えていくことの難しさを感じる今日この頃です。

中国の「荘子」という古典の中で無用の用という内容が記されたものがあります。「人みな有用の用を知りて無用の用を知るなきなり」つまり「有用」なものだけに着目し、「無用」なものは捨てて顧みようとはしない。なんと残念なことかという内容です。

「無用の用」の役割を果たしているものの例として、日常の挨拶がこれに当たります。仮に挨拶がなかったとして生活や仕事は成り立つかも知れません。しかし、たった一言の挨拶で人間関係がずいぶん変わってきます。回りの雰囲気もとたんに明るくなってきます。

有用なものつまり必要なものだけがすべてではありません。

無用の用は、遠回りの教育のようですが、もっとも人間として必要な原点であるように思います。大人も子供も忙しい時代に生きていますが、心の豊かさは必ず教えていくべき「重要」なものと思います。

就任にあたって

由良婦人会長　塩森啓子

今年度、思いもよらない由良婦人会会長という大役を命じられ、私がこの大役をお受けするという事は、とても重荷ではありますが、皆様のご指導、ご協力をお願いしながら、微力ではありますが、一年間勤めさせて頂きたく思っておりますのでよろしくお願い致します。

近年、少子高齢化等、私たちの廻りの環境も、益々深刻化してきているのを感じられずにはいられません。

私たちの住んでいる由良においても、今年、小学校を卒業していく児童が十八名に対して、入学してくる児童が八名でした。入園してくる園児も、今年は六名と年々少なくなってきています。

又、由良における、ある地区では、子供会会員数が、ひとりで二年後にはゼロになるという事だそうです。

又、高齢化問題においても、由良でひとり暮らしをしておられるお年寄りも少なくありません。

暗い話ばかりですが、これらの事を解決するという事は出来ませんが、今、私達に出来る事は、子供達や老人を地域で守り育て行く事だと思います。

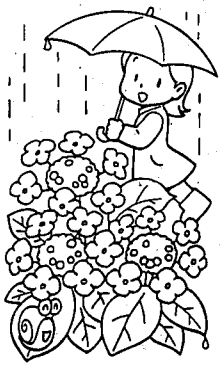
又、それに伴い地域の活性化という事も忘れてはいけない事だと思います。

一方、婦人会の方では、宮津市連合婦人会から他の地域が次々と離れて行かれる中、又、色々な問題を抱えながら、由良婦人会としては、行事の内容等、参加に無理がある場合は、欠席させてもらったりしながら、つながりをもって行く方針で進めさせて頂いております。

どんな行事にしても、参加する事によって得るものは沢山あるという事は皆、わかっているのですが、女性も皆、仕事を持っている今日、参加しにくくなっているのは事実です。

それぞれの生活に合わせて、参加して、少しでも自分の視野を広めて行く事が出来ればいいなと思っています。

婦人会として、今年どれだけ地域に貢献、お手伝いが出来るかわかりませんが、皆で力を合わせて、頑張って行きたいと思っていますので、皆様のご指導、ご協力をよろしくお願い致します。



平成十五年度 人権標語 入選作品

宮津市教育委員会

優秀作品

○由良小学校一年　枡岡佑奈

ともだちの
えがおで
きょうもがんばれる

○栗田中学校三年　岡田朋子

友達なら
本気でとめよう
そのいじめ

現代の生活と子供の健康について

由良子供会連絡協議会
会長　千坂幸雄

昭和三十五年頃の家庭生活を思い出してみますと、車が多くの家庭ではなかったように思います。

遠くに行くのには汽車かバスを利用していました。

二、三キロ先くらいでしたら自転車か歩いていくのが普通でした。田んぼの仕事や山仕事などは子供も一緒になって荷車を引き、作業をしました。

地域の人が一緒になって協力して仕事をしなければ機械がないのでできなかったのです。

炊事は薪でしたし、風呂炊きもそうでした。

洗濯は、井戸から水をたらいに汲んで洗濯板で洗っていました。

掃除は、箒とぞうきんに決まっていました。

娯楽や情報は、ラジオや映画が中心でテレビはまだ一般家庭にはなかったと思います。

子供達の遊びは、上級生も下級生も一緒で山や川・海・砂浜で子供達が工夫して作った遊び道具で遊んでいました。

テレビがないので漫画も含めて読書もしましたし、親によく読んでもらっていました。

今の生活はどうでしょう。

車は、各家庭に一台以上、家庭内は、電化製品でいっぱいです。

体を動かさなくても生活できるのです。

子供達はテレビゲームに夢中になり、外で遊ぶ機会をなくしています。

みんなで遊ぶ遊び方を知らないのです。

学校から帰ってから塾に行く子供達も増えています。

自分の趣味を生かして自分のしたいことがいつでもできる時代になってきたということです。

そのことの利点はありますが、子供達の心と体について考えてみますと今の生活がマイナスにはたらいていることが目立ちます。

まず、自分の世界にいつもいるので自分の世界以外のことに抵抗を感じているのです。

自分中心の世界をつくり、他の人の意見が入りにくくなっています。

みんなと一緒に行動することが苦手になって、「ひきこもり」になる子供が増えています。

社会生活に必要な行動のしかたや態度が養われていないということです。

体の面では、肥満の子供が増えています。

これは、運動と栄養のバランスが崩れているからです。

現代社会にあっては、自分で意識して運動に親しまないとどうしても栄養過多になって肥満になります。

これは将来生活習慣病につながるものです。

肥満以外には、虫歯、近視、脊柱、胸郭異常、アトピー、ぜんそく、腎臓病などの病気になっています。

生活習慣病になる子供も増えています。

環境適応能力の低下も気になります。

暑くも寒くもない良い環境の中で暮らすことができるようになりましたが、いつも快適な環境の中にいたのでは、少し寒くなると寒いといい、少し暑くなると暑いといいます。

私たちは、今の生活の便利なところを上手に使いながらもマイナス面を理解して生活したいものです。

平均寿命もそろそろ下降していくといわれています。

子供達が健康で長生きして幸

せな生活を送ることができるようになるためにできることをみんなで考えて少しでも実行できればと思っています。

赴任にあたって

由良駐在所　中村孝好

平成十六年三月二十六日付で、由良駐在所に配置になりました中村孝好と申します。

簡単に自己紹介させていただきますと、年齢は現在三十二歳、出身は京都市右京区で、家族は、宇治市出身の妻と二歳になる長男「孝詩」との三人暮らしです。

経歴は、大学卒業後、化学会社の工場で勤務した後、警官を志し、平成十一年十月に採用されました。警察学校で教養を受けた後、京都御所や京都府庁を管轄する中立売警察署に配属され、交番やパトカー勤務を経て、当駐在所に赴任してきた次第です。

前任の中立売署は京都の中心部に位置し、官庁等が多くある警察署でしたが、地域住民と警察との関係が良いところでありました。

私にとって、今回の異動は初めてであり、京都市以外に住んだことがありませんでしたので、「宮津」「由良」という言葉を聞いても、最初はピンと来なかったのが正直なところです。

しかし、当地に赴任して、由良海岸、奈具海岸、由良ヶ岳等の絶景を望み、この自然の美しさ、雄大さに感動いたしました。

特に長男「孝詩」を海岸に連れて行きますと興奮状態で、なかなか家に戻ってくれません。

地域住民でありながら、治安維持の責務を果たすという駐在所の勤務については、警察、とりわけ制服警察官である地域警察官にとって、原点とも言える活動であります。

したがって、若輩であるにもかかわらず、駐在所勤務を命ぜられ、一つの地域の治安維持を任されるということは、制服警察官としての誇りです。

とはいえ、駐在所に赴任する前は全く住んだことのない土地で馴染んでいけるだろうかという不安もありました。

しかし、由良では子供が大きな声で挨拶してくれますし、巡回連絡などで住民の方々と話をしますと、労いの言葉をいただきます。

先ほど述べましたように中立売署でも住民と警察が良好な関係にありましたが、当駐在所はそれ以上に住民と警察の関係が良いものであると感じ、最初の不安も今では考え過ぎであったと思っています。

また、治安の良さにも非常に驚きました。もちろん、犯罪が皆無という訳にはいきませんが、現在の一般的な治安状況と比べますと、格段の差があります。

この理由について、考えてみますと、大きな要因として、公民館活動や自治会活動が活発であり、地域の方々の連帯感が強いことが挙げられるのではないでしょうか。

私が以前に住んでいたところにも自治会がありましたが、由良の皆様のように活発な活動はしておらず、近隣住民との関係も希薄なものとなっておりましたので、自分の住む地域の治安について考える機会が少なかったと思います。

最後になりましたが、私は「由良」が今まで以上に「安全・安心な街」として発展していくよう微力を尽くす所存ですので、皆様の御協力と御助言をいただけましたら、幸いです。

よろしくお願いいたします。

楽しい一日間

六年　中西洋介

四月二十九日に由良小のグランドに朝はやく行きました。みんながくるまでゲームをしていました。朝の八時十分くらいに半分以上の人がきました。十五分くらいにラジオ体そうみたいなのをしてその後に、ぼく、中西哉裕君、山口恭兵君と吉元晃平君で途中まで登りました。

一番最初に休憩したのは、第二ごうです。みんながすぐにバテタのでめちゃくちゃ早いけど休憩をしました。その時みんなはお茶を飲んでいましたがぼくは飲みませんでした。ぼくは中央よりすこし下の所にある大きい休憩所で一人で休みました。

なぜ一人で休憩したのかと言うと、第二ごうでみんなより先に行ったからです。ぼくが中央で二、三分休んでいると中一の山下いおりちゃんといそ田りょうすけ君と中二の大森たかし君と六年の田中啓也君に出会いました。ほかにもいろんな人に出会いました。五、六分たってから中央エリアを出発しました。途中、お父さんが木にすわって休んでいました。ぼくたちが体そうをしている時にお父さんが先に行ったけどすぐに追いついてぬかしてしまいました。

それから四十五分くらいして、ようやく一ぱい水の所まで来ました。ぼくは、一ぱいじゃなくて三ばいも水を飲んでようやく落ちつきました。さらに二十五分くらいしてようやく山頂につきました。そのあとみんなが来るまでゲームをしてひまつぶしをしていたら、十五分くらいでみんなが来ました。

みんなが来てから弁当を食べました。山頂で食べた弁当はおいしかったです。その後にお父さんが来て橋立方面に行きました。今年は天橋立も見えてよかったです。その後みんなで下におりました。おりた後に記念のしょう状をもらってみんな解さんしました。楽しい一日になってよかったと思います。

楽しかった由良ヶ岳登山

六年　岡本早紀

みどりの日に由良ヶ岳登山は行われます。私は、今年を入れて四回登りました。そして今年母に作ってもらったお弁当を持って、さぁ、出発です。友達と交流する前、こんなきつい山やのにつかれるかなぁと思っていたけど友達がきたら登る気がでてきました。

一番大変だった所は、杉林でした。急な坂で足がいたくなりました。お茶もなくなりそうでした。と中、一杯水を飲みにいきました。冷たくて、すごくおいしかったです。

「おいしいな。」

「うん、おいしいね。」

などと言いながらたくさん飲みました。頂上まで来た時、

「やっとついた。」

と言いました。頂上の景色を見たら、今までのつかれが飛んでいく気分でした。お弁当もおいしくたくさん食べました。

由良の町がよく見えました。小学校も見えました。かん崎の方も見えました。自分の家は、小さくて見つけられませんでした。

ほかの友達もたくさん来ていました。

帰り、思っていたより坂がき

ついので、
「こんな坂、登ってきたっけ。」と言いました、すると、友達が「ほんとうにすごい坂だね。びっくりするよ。」と、言いました。
たくさんこけて、びっくりしました。それに、友達もたくさんこけていたので、いっしょに笑っていました。家に帰る時には、ペットボトルのお茶が全部なくなっていました。来年も行けるか楽しみです。

いっしょに先生と登った由良ヶ岳登山

五年　森脇千尋

四月二十九日、木曜日に由良ヶ岳登山がありました。
私は、この日をずっと楽しみにしていました。なぜかと言うと、年に一度の由良の行事だからです。
私は、ことみちゃんとゆかちゃんと先生と登りました。
まず初めに、運動場で、体そうをしました。朝早くだったので、ラジオ体そうみたいでした。
次にいよいよ、由良ヶ岳に登りました。最初は、みんなと話していました。でも急坂でだんだんつかれてきました。
でも、毎年登っていたので、なれていました。
だんだん友達とはなれていってしまいました。友達は、山登りがとくいで、すいすいいきました。私は、休んでは歩いてのくりかえしでした。
そのうち先生ともはなれていきました。
と中で、中学一年生と会いました。でも、私は一人で登っていきました。
『一ぱいの水』で、ちょっと水をのみました。
山の水は冷たくて、おいしかったです。
もうちょっとで、ちょう上の時、うれしかったです。
ちょうじょうについた時、気持ちがスカーッとしました。
ついた時には、もう、友達はついていました。
数分後先生もとうちゃくしました。
先生が来てから、すぐご飯を食べました。おいしかったです。その後けしきを見ました。

由良ヶ岳登山

五年　枡田有加

四月二十九日木曜日、今日は、由良ヶ岳登山の日です。
家でおばあちゃんにお弁当を作ってもらって行きました。
初めは、学校のグランドに集合して、体操をしました。
私は、おじいちゃんと、琴海ちゃんと愛犬のララと行きました。
私達が歩くのが、速すぎたのかなと思ったりしたこともありました。なぜかと言うと、ララが、「ハァハァグァグァ」と、えらそうに言っていたからです。
学校のグランドが小さく見えました。自分の家を探そうとしても小さくて分かりませんでした。その日は、晴れだったので海もきれいに見えました。
三十分ぐらいしてから下りていきました。前の日が雨だったから、土がヌルヌルしていて、あぶなかったです。
帰りしにまた、一ぱいの水を水とうにくんでかえりました。
すごくたのしかったです。
また、登りたいです。

上がりきってからお弁当を食べて、西山へ行きました。
天橋立がきれいに見える、おくの方へ行きました。
下りる時は、ララがひっぱるので、少しこわかったです。
下りおわってから、一つ思ったことがありました。
それは、
「なんとなく下ってしまうと、山が小さく見えるな。」
と思いました。

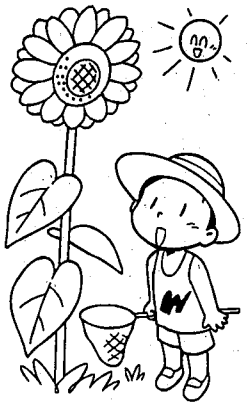
旅は気儘（きまま）に　パート12

丹後由良ターミナルセンター

今年は五月晴れをあまり感じなかった様に思いますが、暑くもなく、寒くもないこの季節はいいですね。新緑の風が心地良くふいています。今年の駅の周辺は、黄色い月見草がいっぱいで、緑と黄色でお互いに引きたてあっている様です。その中に紫のつゆ草（別名いんき草ともいうそうです。）が一層綺麗に咲きほこっています。先日、男性の方が一人で、もくもくと駅前、トイレ横、ホーム側などを草刈り、草ひきして下さり、頭の下がる思いでした。他にも、いつも切り花を持ってきていただいたりの方もあり嬉しいかぎりです。それと反対に、折角植えて下さった二十本からの花を、ある日すべて、引かれてどこにも見当たらなかったり、今年の卒業記念のプランターのパンジーが一部引かれていました。他にも壊される物があったり、朝びっくりする事もあり残念に思います。昨年の夏からこの駅に小ちゃな駅長さんが来てくれます。ただの列車好きではないのです。ゴミの分別から、列車のお出迎え、見送り、乗降調査等大忙しですが、最近は学業、クラブにまたまた大忙しです。きっちりと予定をたてて、何事にも一生懸命です。その駅長さんと度々列車に乗る事があり、単調なタンゴ鉄道を楽しんでます。ある日豊岡までの、すべての駅で降りて見学しました。車内では、丹後大宮の辺から、言葉のイントネーションが変わります。学生のいる時間は、宮津からちがってました。年輩の方の話し方はのんびりと聞こえますし、親しみが感じられます。

何とも言えない流れの言葉が、外の景色とマッチしていました。宮津線、西舞鶴～豊岡間十九駅その内、無人駅六駅、宮福線、宮津～福知山間十四駅、その内無人駅十一駅。宮津駅は重なっています。駅舎として、丹後由良駅＝ヨットの帆をイメージ、栗田駅＝かもめが羽根を広げた感じ、野田川駅＝着物を広げてる感じ、丹後大宮駅＝竜宮城、峰山駅＝機織機、網野駅＝ヨット、久美浜駅＝すごい瓦葺きの屋根、天橋立駅の玄関前は白砂に波が動いてる様子など、それぞれの特徴が楽しいです。どうしてもなくなってほしくない路線だとつくづく思います。また時間をつくって楽しみをみつけに出かけたいと思います。

季節停車として、タンゴディスカバリー京都行、午前と午後の二本、京都からの午後の一本は冬期が終了しました。次に夏場の季節に停車致します。どうぞ御利用下さい。乗って守ろう宮津線ですね。こんなさわやかな季節が長ーいといいのに…。



短歌

山口幸一

〝カラパオ〟(水牛)と叫びて投げる住民の石つぶてを浴びて車上に泪す
(六十年前、武装解除され、移動する私達に現地住民の憎悪は激しく!)

ならば何故、銃執りしかと訊く子等に有事法阻止の動きもなくて

国民保護法案審議のさなか満州より棄民とされし人ら帰り来

坂本妙子

生きている何んて素晴らしいことだろう山は朝日にまばゆく映えて

夫逝きぬ　身は空蝉の心地して如何に明日を生きゆかんかな

あれしきの淡雪に奪られし夫想う空ろなる身は生き惑いつつ

とよ子

枯葉舞う境内に在り若衆連船頭踊りの揆先つよし

一陣の風に落葉舞い上がり太鼓の若衆肩よせ踊る

谷間(あい)の蕗匂う原に身をしずめ妹とふたり昔を語る

大森美智子

刻々と月下美人は開きたりまるで生きてる花の矜持よ

半分はお花畑にしようかと夢も広がるわたしの畑

貨物船かマストの見える沖合いは薄墨色に暮れ迫りおり

大森萬喜子

庭池に雄鴨雌鴨の羽繕いわれものどかに南禅寺を巡る

水路閣くぐる道辺の紅若葉にとんぼが遊ぶ翔光らせて

わたくしも音声ガイドを耳にして南禅寺展の名宝をみる

山田よしの

凛とせる声ひびかせて門に立つ僧の素足の白まぶしかり

小春日の温き日ざしを背に受けて紫蘇の種蒔く弥生の十日

今の世の乱れも知らず咲き満ちて由良駅前の桜しずけき

山口美子

花散りて青葉の樹下の濃く淡くかげやわらかなすず風の道

いつしか堤に生いし合歓の木は枯木となりぬ西風の中

畦道のつくしん坊は背くらべす　しきりに揺らす突風に耐え

藤本史代

心象は絵の中にあり魅せられて引き止められてモネの睡蓮

安息のまどいは水面に漂いてモネの睡蓮われを手招く

錯覚もまたよしモネの姿(かげ)よぎる睡蓮ひらく池の畔に

中西夏江

三門は「三解脱門」煩悩のままに上れば楼上　畏(かしこ)　(南禅寺)

歌舞伎なればこその石川五右衛門が大見得を切りし楼上は首夏

畏まりまた愉しみて裡(うち)に抱く悲喜ひるがえし三門下る

経ヶ岬から潮岬まで（2）

四方俊一

寝袋から顔を出すと薄明かりの時刻、午前五時、急いで朝食を済ませ出発の準備をする。

谷間から昇る冷気、体が引き締まる、目指すは「野中」、弥栄町野中は昔、須川、丹後町大石、宮津市日ヶ谷、成谷と共に与謝郡に属し集落は丹後半島の中央の山間部に有り周辺には金剛童子山、太鼓山、小金山が有り、その間を縫って宇川の上流、野間川が北流する。建久三年（一一九二）丹波某願文にその名が見える歴史ある集落である。宝永二年（一七〇五）の宮津領辻高帳によれば野間村は野中と須川村の二村として別々に格付けされ両村とも宮津藩領である。須川村から右を取れば弥栄町の中心街に出て網野町に至る。味土野は谷間を直進する。この須川村は木地師の集落であったと云われ小倉神社は小椋氏の氏神であったと云われている。須川村にある「鎧ヶ渕」は平家の落武者が不用な武器・具足などを投げ捨てた渕であると云い、小字尾崎にある天和二年（一六八二）刻銘の地蔵石仏その他は、平家落武者を供養するための地に立てられたと伝える。明治二十二年（一八八九）須川村と野中村は合併して野間村となった。昔、須川地区には吉野、来見谷、霰、須川、大谷、味土野、成谷があり、野中地区には川久保、田中、中津、中山、野中、住山の各集落が有ったが昭和三十八年の豪雪で離村し消えた村が多い、この様に野間渓谷は両岸深い渓谷を成しその中に集落と耕地が点在する様に在る。左の谷に「霰」の集落を見ながら更に奥へと足を運ぶ、道は狭くなり車両一台が通行できる道幅になって来た。出合う車両は無いが静かな道、黙々と歩く、左下は宇川に繋がる野間川の流れ、水量も豊富だ。漸くにして味土野の集落が見えて来た。道路左手に弥栄町営の宿泊施設（旧分校）、右手に農家が四戸在り山の斜面に建っているが人影が無い、全く静かで有った。暫く歩くと大きく開けた屋敷跡地に出た。そこは小高い丘になり眺望の良い場所、その中心に石碑があり表面に「細川忠興婦人隠棲地」と刻んであった。この地に隠棲している時は「細川ガラシャ」と名乗ってはいないが観光案内書・地図等には「ガラシャ記念碑」としてある。「本能寺の変」天正十年（一五八二）六月二日未明、京都四条西洞院本能寺に宿泊していた織田信長を、その臣、明智光秀率いる一三〇〇〇の反乱軍が急襲した。信長は自刃。その十一日後、光秀は羽柴秀吉と山城国山崎で衝突、近江坂本へ敗走途中、小栗栖で土民の槍に突かれ、五十七歳の生涯を閉じた。彼は謀反者の烙印を押されることになる。彼には二男三女の子が有り、その中に玉子と云う娘がいた。玉子は永禄六年（一五六三）に生まれ、天正六年（一五七八）十六歳の時、同年の細川忠興と結婚した。仲人は織田信長。婚家細川家は、室町初期より代々管領職（幕府最高の職・将軍を補佐し、政務全般を統轄した）を与えられた名門であり、忠興の父藤孝は文武両道に優れ、古今伝授（古今和歌集中のある語句の解釈に関する秘説等を伝授すること）を受けた程の歌道の権威者であった。二人が結婚した年の春、藤孝と光秀は共に丹波丹後平定のため出陣している。この結婚は双方にとって甚だ喜ばしい。家柄も相応しい者同志の縁組みであった。だが、それから四年後、先出の本能寺

の変が起きる。変が起きるや直ちに藤孝は剃髪して幽斎玄旨と改めた。又、細川家では光秀からの勧誘を断って、秀吉の弔い合戦に参陣し、その異心無きを誓って玉子を離別した。玉子は、丹後の山中、味土野に幽閉されることになった。以上の物語は各種の出版物に記載されているが玉子は如何にして味土野に行ったか？丹後宮津城（大窪城）の近くの浜から「天橋立」の松並木を左手にして早石の沖を過ぎ日置の浜に着く。そこから玉子一行は細い山道を登り、瀬谷（世屋）から駒倉を通り味土野に着く迄、数人の家臣に守られながら歩いた。時折吹き抜ける風、小鳥の囀り以外は小川のせせらぎぐらいであったろう。そして二年数ヶ月の幽閉期間の生活は大変なものと想像する。その味土野は今は数戸の家が在るのみ、当時は四十戸～五十戸の農家が在ったと推察される。ところが舞鶴市の郷土史家は舞鶴湾から由良沖を船で渡り日置浜に上陸したと云う説を唱える。色々と説は有るが議論には切りが無い。当時は山また山の中、「細川忠興婦人隠棲地」の石碑の在る所から、駒倉、木子の山々が見られ「女城」と称した。家臣の住む所はやや下がって「男城」とされる……「細川忠興婦人隠棲地」を後にして大宮町に向け足を運ぶ、道路は段々と狭くなり軽自動車一台が何とか通れる程の道幅になって来た。身の丈程の雑草が両側から覆い被さってくる。やがてその道も山道となる。そこは「味土野越へ」と云って大宮町から弥栄町への峠道であり、弥栄町、大宮町、宮津市に跨る広大なブナ林地帯であった。周囲三～四米位の大木が幾本もありそれは見事なブナ林である。鳥の囀る声以外は横切る風の音のみ静かな世界である。この地域は京都府自然環境保全地域に指定されていて近畿地方では貴重な存在となっている。昔は丹波丹後地方にもかなりあったものが植栽の変化で段々姿を消していった。ここ内山でも同じ様に消えて行こうとする所を自然を大切にする地元の人達によって守られ、整備されて来たのである。蛇行する山道を麓に向かって只管に下る。高尾山の裾を超え「内山」に入ると後は下り道であり、谷川には飛騨山椒魚が生息していると云う、やがて大宮町五十河に着いたのは午後二時過ぎであった。五十河の里は語源的に云えば「イカ」と云う言葉は「山麓」等で山を負う土地を指す。或いは洪水の起こり易い所を「イカ」と云ったという説がある。又伝説によると、三重長者五十日真理人という者が住んで居たのに由来すると云われている。ここには小野小町の伝説がある。世界三大美女と云えばクレオパトラ（エジプト）楊貴妃（中国）小野小町（日本）と云われ、小野小町開基の伝説を伝える小野山妙性寺（曹洞宗）があり南方（ハサコ地区）には「小野小町塚」があって今は大きな記念館が出来ている。小野小町伝説はこの他、全国に在る。又、億計、弘計二王子隠遁伝説の地でもある。北の高尾山に源を発した竹野川が南流、東部を五十河谷川が西流して竹野川に合流して沿岸は耕地となる。近年、機業が盛んになって歩いていると機業の音賑やかであった。ここから岩滝町の男山迄、約五キロの道程、車も余り走らない農村の風景、大宮町、岩滝町、宮津市に跨る「皷ヶ岳」（五六九米）に源を発する男山川が阿蘇海に注ぐ、その肥沃な大地は農業が盛んであったが昭和四十年の半ばから機業が普及し、方々の軒先から機の音がする。この地は古代から古墳群があり、法王寺古墳、千原古墳、塚ヶ谷経塚（経典を書き記し経筒や経箱に入れ地中に埋納し、小塚を築いた遺跡）そして板列八幡神社は平安期の創建とされている。

この男山の国道一七八号線に出て岩滝の町中を歩いた。夕刻の町は全体が機の音で賑やかであった。「岩滝町」は「丹後縮緬」と切っても切れない関係、享保年間（一七一六～一七三六）頃から始まったが幕末に至ると、小室家（山家屋）、糸井屋、千賀屋など廻漕問屋の兼営する糸絹問屋が成長を遂げ、日本海海運による奥州糸の直接移入により、宮津の糸絹問屋資本及び宮津藩権力と結んで京問屋の独占と対抗すると共に、他方在地問屋資本として京問屋に代わる機屋支配を行った。この日本海海運の北前船を操作したのは勇猛果敢な由良の船頭達であった。又戦国期には丹後守護家一色氏の興廃が絡む、織田信長幕下の細川・明智両氏の進攻に対して、一色氏は弓の木城に拠り奮戦したが叶わず丹後一円は細川氏に帰する所となった。その折り、鉄砲上手といわれた「稲富伊賀」のことが一色軍記に出て来ると云われている。近年は、昭和二十九年宮津市制が敷かれた際、未合併として残り独自の自治体として「機業」を産業として発展して来た。太陽も落ち、街灯の点る頃、文珠に着く。松並木南部、小天橋の西、狭い水路を挟んで位置する「国特別名所」に指定された「天橋立」である。天橋立には臨済宗妙心寺派天橋立智恩寺が有る。その門前は旅館、民宿が多い。智恩寺は古来、久世戸又は文殊堂と呼ばれ、参詣客が絶えない。同寺には国重文の鎌倉期の文殊菩薩像、善財童子他数多くの宝物が有る。古来より各界の名士が訪れ、その景観に酔い、名歌に詠われている。文殊の外れに「義士民追頌碑」が建っている。永い武士社会の中、宮津藩に対する農民の根強い抵抗を記念して建てられた。又、岩見重太郎、犬の堂等の伝説も多い所である。杉ノ末（旧荒木別荘跡＝日立造船職員共済施設）から宮津市街地を足も軽やかに通り抜け大手橋に達する。室町時代当地方は、一色氏の治める所であったが、天文六年（一五三七）細川幽斎が織田信長の命令で、一色一族を攻略した。その功績で幽斎は、天正八年（一五八〇）田辺（舞鶴）に城を築き、同十二年忠興に譲って宮津の八幡山にあった一色氏の居城を再築して入城した。その後細川氏が九州小倉へ転封すると、京極高知が田辺城に入り、宮津城を築く。宮津城は天守閣は作られなかった。その代用として城内八ヶ所に櫓を置き、西に外堀とした大手川に橋を架け、東側の外堀に至る間に六ヶ所の城門を配した。京極氏後には、永井、阿部、奥平、青山、本荘（松平）の各大名が入り、代官がいた時期もあった。明治五年（一八七二）城は取り壊され、今では市街の中心地になり、面影はほとんどなくなった。松縄手（喜多）地区の我が家に帰宅したのは夜の八時を過ぎていた。経ヶ岬から我が家迄約八十キロを十六時間で歩いた事になる。まずは順調な出足、疲れた体を我が家で癒す。ここまで来た以上、京を目指す。可能な限り京に近づこう。翌日の出達準備をして深い眠りについた。

（次号に続く）

楽しみの再会　由良岳

宮津市　松井和子

風そよぐ春。新緑の香りに誘われて遠方からも訪れるであろう由良ヶ岳に登りました。我が家にとっての由良ヶ岳は主人に至っては小学五年の同級生との初登頂に始まり、今は社会人に成長した子供との親子での山登り、運動不足の解消に出来るだけ自宅から近く、低い山を探して自然を親しむ場でありました。

一昨年までは思い付いた時に主人と友人を交えて東峰登頂のみに終わっていましたが、昨年始めて一斉登山に参加させて戴き北近畿タンゴ鉄道丹後由良駅近くに車を止めて由良小学校を横に見て由良ヶ岳の美しい姿を目に入れ、如意寺では山椒大夫に焼きゴテを当てられた厨子王の額の傷を代わりに受けていやしたという「身代わり地蔵」を見たり歴史散策をしながらのんびりするのも良い体験でした。

国民宿舎丹後由良荘から登り始め標高六四〇mの西峰と東峰を登ることが出来、自然を満喫して帰路につきましたが、頂上にて学友のKさんと出合い次回の一斉登山に再会を約束して別れました。それだけにこの今年の登山会は待ち遠しく感じられ由良ヶ岳のみどりといい香りといい、昨年親子三代で登頂されていてほほえましく目に写ったことが、また下りの道で初心者の「ひざが笑う」状態で下山したことが思い出され懐かしさを覚えました。自然観察にも似てワラビやゼンマイ、春から初夏にかけてのごく短い期間しかとれない、こごみを自然の中では余り見かけたことがなく感動でした。

昨年の登山会を教訓にスキーストックを杖にして、ゆっくりと休まず歩くことが肝心と「体だけでなく、心も満足と山登りの効果大」を期待し楽しさを実感。

頂上は風がなく無風にて気温よく最高の日本晴れ、若狭湾も一望に一年ぶりの再会です。約束通りKさん夫妻は私達が登頂するのを待っていて下さいました。

自然のすばらしい美しさと共に感動できる機会を与えて下さり、登ってくる人に「お疲れさま」「こんにちは」と声をかける他人への小さな心配りが大きな充実感となり今年も自然の恵みを思いっきり堪能できた登山会でした。登山道を整備して戴き、合目の道標を作成して戴いたこと、新しい発見でいっぱいでした。ありがとうございました。私達の自慢になります。一杯水の名水もペットボトルに詰めお土産にしました。多くの人にもっともっと知ってもらい沢山の人が楽しみながら健康づくりができ、由良ヶ岳登山も三十七回を迎えた今、昨年は二五〇人の登山者が訪れたと聞き、知名度のアップもあり、地域活性化の一大イベントとしても定着して来ているのではないでしょうか。

来年も天橋立を若狭湾を眼下に笑い声であふれることを願っています。

シベリアの思い出

田中貞彦

終戦後六十年が間もなくやってくる。もう二度とあの様な経験はしたくない。又誰にもさせたくない。五十九年経った今でも尚脳裏にこびりついて離れない数々の思い出。想像もしなかった北満（現中国東北）、シベリアの厳寒。又極北とは思えぬ夏の暑さ、その上ブトの大群。そのような最悪の環境の中での強制労働。しかし今それらの事を思いうかべる時、そのつらかった事以上にはっきりと頭に浮んでくるのは、親身になって心配し励ましてくれた多くの戦友達、炊事経験のない自分にあたたかく指導してくれた炊事班の人々、又後になって農作業に出た時も足手まといになる自分のノルマ（与えられた作業量）まで手助けし完遂させてくれた作業班の戦友達の顔や声や又大声で笑う仕草です。軍隊生活から捕虜、そしてダモイ（帰国）その間お世話になった上官、戦友達に、又祖国へ帰る事を夢見ながらウヤツカの丘の上に今尚、眠っている戦友達に感謝の気持ちを表す為にも一つ一つ思い出しながら筆をとろうと思います。

あのきびしい抑留生活の中、筆記もままならず、又多くの戦友の住所録さえ持って帰れず、それ等の人々の顔を頭に浮かべながら、唯記憶をたよりに、又年一回の戦友会での思い出話から出来るだけ正確に記したつもりです。

昭和二十年八月九日午前三時頃だったろうか。不寝番の「非常呼集」連呼とラッパの音にとび起きる。軍装を整え営庭に集合。その瞬間、それを待っていたかの様に遠くで爆音が聞こえ、同時に真昼のように明るくなった。照明弾だ。全員その場に「伏せ」の姿勢。その間遠雷のように爆発音が聞こえる。方向から見て多分ハルピンが空襲をうけているのだろう。夜明け前で敵機も友軍機も見えない。ここはハルピンの北東に位置する成高子という周囲には何もない平原の真っ只中に兵舎だけがある。どの位の時間、伏せていただろうか。その内に照明弾も爆発も絶え元の静けさに戻る。

部隊長より「本日未明国境方面にてソ連軍の攻撃を受け国境部隊はこれを激撃中、吾が部隊も只今より臨戦態勢に入る」との訓辞を受ける。それでは今の空襲はアメリカではなくソ連だったのか。愈々来るべき時が遂に来た。精鋭の揃った関東軍が国境でソ連軍に鉄槌を下している事だろう。（しかしこの時すでに関東軍の主力は南方戦線に！又本土防衛に転進して手薄になっていることなぞ知るはずもない）

吾々通信隊は昭和二十年七月奉天（現在の藩陽）、新京（現在の長春）孫呉等の通信隊より転属を命じられ、新たに編成された第三十軍司令部に編入、郡直轄の通信隊として新京防衛の任務につく。又編成時に召集された在満邦人も相当数入隊し内務班は現役兵とこれ等の兵隊と混じり奉天時代のような鬼軍曹も意地悪上等兵もいない。もちろん軍隊である以上朝夕の点呼、昼間の演習は行われたが、入隊当時のあの生き地獄のような内務班ではなかった。空襲以来臨戦態勢とはいうものの特別変わった事もなく過ごすうちに急に「明日新京へ出発する」との命令を受け直ちに出発の準備にかかり貨車に通信機材などを積み込む。これから首都防衛の任務を負って新京へ出発する。国境では今でも激戦が続いているのだろうか。八月十五日早朝、新京駅に

到着しさっそく列車より器材などをホームに降ろし小休止。吾々を乗せてきた列車がホームを離れた瞬間、その向こう側に停車している無蓋貨車にぎっしり詰まった人、人、人。その全てが婦人、幼児だ。背中に赤ん坊、左手に幼児、右手に風呂敷包み一つ、又すでに死んでいる幼児を胸に抱き続けている母親、それだけ多くの人たちも皆疲れきって声も出ない。多分幼児も泣き疲れたのだろう。彼女たちを眺めていると彼女等の中から「兵隊さん頑張ってね。私達は牡丹江（ボタンコウ）から南下してきたけれど多分ソ連が満州に入って来ている。早く前線に行って下さい」と叫んでいる。その声で貨車の人々は急に元気が出てきた様に何か口々に叫んでいる。多分彼女達は開拓団の人達だろう。間もなく列車は朝鮮に向け南下して行った。小休止後隊列を整え南陵へ向け行進を始める。途中関東軍司令部の前を通る。部隊本部より「正十二時天皇陛下の玉音がラジオで放送されるので皆聞くように」との伝達があり児玉公園に入り放送を聞く。しかし内地からの放送か、その他の理由かザー音が入り聞きづらい、たぶんソ連参戦に依り、一層努力せよとの放送だろうと戦友と話していたがどうも様子が違う。他の無線機で傍受していた戦友から戦争が終わったと報告があった。そんな馬鹿な。吾々はまだ戦ってもいないのに。とにかく南嶺に向け出発するが誰も無言、やっと南嶺の通信隊の兵舎に到着。各内務班に入る。夕食が終わった頃新京駅前にある大和ホテル付近で満人（中国人）の暴動が発生、満州軍も加わっている模様。「居留民保護の為出動せよ」との命令が出された他中隊より出動し明け方帰隊する。相当発砲されたらしいが怪我人もなく大事に至らなかった。翌日トラック二台に分乗し新京貨物廠（軍隊の物品倉庫）へ行き、新品の被服、酒、甘味品、食糧等を満載し部隊に持ち帰る。その夜はこれ等で小宴会。大声で歌う者、戦争に負けたと涙を流す者、昨日迄厳しい軍隊も、もうここには存在しない。しばらくすると隣の班が急に騒がしくなった。何事かと見に行くとH上等兵が銃を喉に当て自殺しようとしている。相当酒が入っているようだ。戦争に負けて生きていられるかとわめいている。皆でなだめ何とか落ちつかせその場はおさまり元の宴会に戻る。その後消灯、就寝ラッパで床に就く。開戦、終戦、新京駅で出合った婦人や幼児達の様子が走馬燈のように頭の中を駆け巡り仲々寝つかれない。戦友達も皆同じ様な思いなんだろう。ウトウトしかけた頃突然銃声が聞こえ跳び起きる。殆ど一斉に隣の内務班を覗くと昨夜のH上等兵が銃を喉に当て足の親指で引き金を引き自殺してしまった。夜中二時すぎの事だった。十七日朝の点呼時に「本日南嶺を出発し十八日中に公主嶺に到着すべし」との命令を受ける。「各自完全軍装で食糧は持てるだけ持て」との指示も出る。新品の軍服に着替え軍装を整え直ちに出発する。公主嶺迄約八十粁の道のり営舎を後に行軍が始まる昼すぎになって雨が降り出した。道は満州特有のぬかるみ状態まるで水田の中を歩いているようだ。雨に打たれ軍服は重く銃は肩にくい込む、背中のハイノウも重い。唯黙々と歩くだけ。五時間は歩いただろうか。小さな神社があり社殿の前に四、五十人の民間人が休んでいる。殆ど女、子供ばかり、この人達もどこかの開拓団の人々で避難してきたのだろう。女学生らしき女の子が兵隊さん一緒に連れて行ってと悲しげな声が聞こえるが吾々にはどうしてあげる事も出来ない。黙って通りすぎる。その後彼女達はどうなったのだろう。彼女達の行く末を案じながら吾々

は公主嶺へ雨の中泥田のような道を歩き続ける。突然両側の高粱畑の中から自動小銃（マンドリンによく似た形をしているので吾々はこれをマンドリンと呼ぶ）を手にソ連兵が現れ吾々の行く手をさえぎり何か叫んでいる。「しまった。」もうこんな所迄ソ連軍は進出していたのか戦時中なら斥候を出し偵察しながら行進をするのでこんなへまはしないのだが今は状況が違う。部隊本隊でソ連軍指揮官と何か話し合っているらしいが言葉が通じない、でもどうやらここで武装解除をするということらしい。改めて指揮班から「全員銃と帯剣を指示した場所に置くように」との命令が出された。今まで大切に手入れをし、磨き、キズ一つないこの銃を満州の何処とも分からぬ高粱畑の中に捨てるのかと思うと実にやりきれない気持ちだ。でも止むを得ない戦争に負けたんだ。と自分に言い聞かせ銃と帯剣を所定の場所に置く。武装解除後隊列を整え行進を始める。今までと違い列の前後左右にはマンドリンを抱えたソ連兵が警戒している。若い少年のような顔をした兵隊、又腕には刺青を入れた兵隊、凄い体格の兵隊、又彼等の歩くのが早いこと「ヴィストラ、ヴィストラ」（早く、早く）と追いたてるように怒鳴っている。彼等はドイツ戦線から急遽極東へ転出してきた外蒙古の兵隊だそうだ。満州の夏の夜は陽は落ちても何時までも薄暮れのように明るい。しばらく歩くと前方に学校か公会堂が、ここは何処か、誰も知らない。唯黙々と歩く。たまにソ連兵の「ダバイ、ヴィストラ」（早く歩け）の声が聞こえる。あまり良い言葉ではないがこれが初めて知ったロシア語だ。相変わらず泥沼の様な道を歩きやっと学校の校庭らしき処へたどり着く。夜を通しての雨中の行進。皆の疲労はその極に達している。新京の部隊を出る時に持ってきた携行食を口にしその場で野宿をする。ウトウトする間もなく満州の朝は早い。三時すぎにはもう明るくなってくる。六時頃になってソ連兵が何かわめいている。多分整列せよと云っているらしいが素知らぬ顔を決め込む。それにしても彼等はタフだ吾々の行軍中を前に走り、後ろに走り長い隊列を警戒しながら一晩中走り回っている。さすがドイツ軍と戦ってきただけの体力の持ち主だ。炊事班からの朝食の飯上げの号令がかかりやっと立ち上がる。今度は彼等の人員点呼だ。これが又時間がかかる十人宛横に並ばせ十列あれば百人。二十列であれば二百人。当たり前の事だが隊列がとれず十人が八人になると計算が出来ない。又初めからやり直し。それを何回も繰り返す。広い国土、教育も行き届いていないせいだろう。日本人にはとても考えられない。朝食後ここで二、三日待機すると伝えられた。いつの間にか何処からか満人（中国満州族）がタバコ、マントウ等を売りに来ている。満州紙幣は通用しないが日本紙幣はまだ通用する。金のなくなった者は時計や万年筆でタバコと交換する。満州のタバコ「前門」は日本のピースと一緒でさすがうまい。それを見ていたソ連兵は満人を追い払い時計をくれ、万年筆を呉れと言い略奪に等しい形で取り上げていく。余程時計、万年筆が珍しいのだろう。左、右手に二個、三個はめて喜んでいる。又捻子を回すことをしらないのか時計が止まると日本人がもう駄目だと教え捨てさせる。そしてそれを後で拾う。

今日もこの校庭で野営だ。食糧はまだ充分にある。八月十九日朝食後やっと出発の令が出る。今度こそ公主嶺へと隊列を整え行進を始める。

注釈：終戦直後の状況を語るため、旧国名、地名を使用しています（現在、中国、ロシア等）

丹波丹後地方の鉄道敷設の歴史

四方寿朗

由良出身で現在枚方市に在住の三森進氏に昨年末、私の写真集をお贈りしたところ、その御礼にと生前父君三森光治氏が残された新聞のスクラップ帳を五冊頂戴した。大変興味深い記事が多くあり今回はこれを参考に、この地方の鉄道敷設の歴史を書くことにする。

①福知山線

日本に初めて鉄道がついたのは、明治五年新橋ー横浜間である。それから二十七年後の明治三十二年に、大阪ー福知山間に福知山線が開通したのだが、この地方の鉄道敷設の始まりである。これは大阪の軍需工場から舞鶴海軍へ軍用物資を輸送するための鉄道だった。工事は日露の戦勝景気で順調に進んだ。福知山から先は船で由良川を経て舞鶴まで海路を利用した。この船便は明治三十七年に舞鶴線が開通するまで大いに繁盛した。また福知山もこれで大阪と直結し、由良川舟運の要地として丹波第一の商都に発展した。しかし船が大きくなると由良川は水深が浅く、由良港も遠浅で港の役を果たせなくなっていた。

②舞鶴線

日本は日清戦争には大勝したが、折角手に入れた遼東半島を、ドイツ、フランス、ロシアの三国干渉で失った。そのため軍備の強化に向かって軍国主義が急速に力を得て行った。

明治三十四年舞鶴に海軍鎮守府が設置され、軍港の重要性が増し、福知山から由良川をさかのぼり綾部を経て舞鶴まで、鉄道を延長することになった。しかし鉄道の受け入れについては、各地区で多くの誘致や反対運動が起こった。例えば綾部の駅は最初由良川の東側、味方に決まっていたが、西側の地区から誘致運動が起きて、現在の西側に変更になった。また西舞鶴から東舞鶴までの路線にしても、鎮守府のある中舞鶴を通る案もあったが、元の倉梯村々長の強い運動で現在のコースとなった。当時東西両舞鶴駅附近は人家の全くない水田の中だった。また白鳥トンネルは難工事で、完成を急ぐため、東西両側と真ん中からも縦穴を掘っての工事だった。因みに福知山東舞鶴間の運賃は四十一銭、客車内の照明は石油ランプであった。

③鉄道と舞鶴港

阪鶴鉄道が開通した頃の舞鶴港は、宮津航路の船がやっと接岸できる程度で、島根の境航路の浮世丸（四〇〇屯）の貨客の乗り降りは、沖のハシケで中継した。それというのも、旧藩時代舞鶴港は田邊城に近く、防備の上から藩が地元以外の船の出入りを認めず、粗末な港であった。しかし阪鶴鉄道の開通により、舞鶴湾が天然の良港として見直された。京都府は明治四十一年から五年の歳月を掛けて約三万平方メートルを埋め立て、現在の第一埠頭を造り、三〇〇〇屯級の汽船二隻が接岸可能となった。これに習って東地区でも大正二年、府費で与保呂川河口に新舞鶴桟橋を造った。しかし、やがて第一次世界大戦後の軍縮時代に入り、大正十二年海軍鎮守府が廃止されると、新舞鶴は急に活気を失った。

其の後、昭和四年から九年の歳月をかけて第二期修築工事が行われ、現在の第二埠頭が完成し、六〇〇〇屯級の船が接岸可能となった。港の設備も充実し、国内外との対岸貿易も盛んになった。昭和十二年に日華事変が始まり、舞鶴鎮守府が再び復活した。昭和十三年舞鶴は舞鶴市に、

新舞鶴は東舞鶴となったが、戦争で商港はさびれた。昭和十六年太平洋戦争に突入し、昭和十八年軍部の強制で両市は合併させられ、新しい舞鶴市が誕生した。

④山陰本線

京都から舞鶴までの鉄道敷設は明治二十年頃から計画されたが、直ぐには実現しなかった。明治二十九年漸く工事が始まり、明治三十年に嵯峨まで、三十二年に園部までが完成した。しかし保津峡の難工事で多額の経費を費やし、以後の工事は大幅に遅れた。

園部から綾部までは、最初は現在の国道九号線に沿ったコースが有力であった。しかし須知、三和などから「汽車が通ると昔ながらの宿場が廃れる」と反対の声が上がり、現在の殿田、和知コースとなった。しかしこの路線は四十二キロメートルの間にトンネル十二、鉄橋を四十造るという難工事であった。その上胡麻駅への登り勾配が急で、カーブも多く、機関士泣かせといわれた。それでも明治四十三年やっと完成した。

山陰線の福知山以西は、綾部ー福知山間から四年遅れて、明治四十一年に和田山ー八鹿間が先ず完成した。次いで八鹿ー城崎間が明治四十二年に、福知山ー和田山間が明治四十四年にそれぞれ完成した。翌四十五年には京都ー出雲間が全線開通した。

⑤宮津線

宮津地方での鉄道誘致運動は、明治二十五年当時の宮津町長黒田宇兵衛氏によって始まった。宮津港を対岸貿易の商港にするには、先ず鉄道が必要と力説した。宮津商港期成同盟がつくられ、宮津ー福知山間を結ぶ路線を計画したが、日清戦争（明治二十七、二十八年）で中止となった。翌二十九年「丹後鉄道株式会社」が設立されたが、経済不況で解散となった。明治三十五年今度は与謝郡会が政府に働きかけたが、成功しなかった。日露戦争後の明治三十九年に新たに宮津ー福知山間の電気鉄道を計画し、株式会社をつくったが、財界の変動で解散となった。ついで明治四十一年宮津町の中川雄斉氏ら六六〇人の有志が「宮福鉄道敷設請願書」を貴衆両院に提出し、衆議院で可決されたが、これも資金難で実現しなかった。

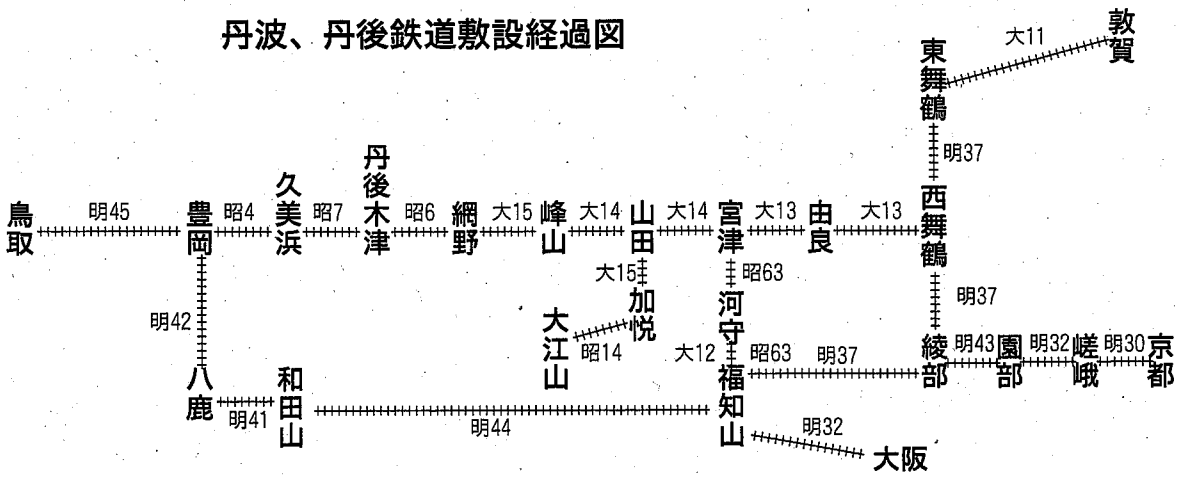
このように丹後住民悲願の鉄道敷設は、度々の挫折を重ねていた。大正五年に宮津町議内山広三氏が京都選出の代議士片岡直温氏（後の蔵相）を丹後鉄道期成同盟会長に推し、峰山など各町村に呼びかけて組織を固め、木内京都府知事に働きかけてやっと測量費の予算獲得が実現した。其の後峰山の吉村伊助代議士が会長に就任し、国の事業とすることに成功した。こうして実に六度目の運動がやっと実を結び、大正七年舞鶴ー豊岡間八十四キロの敷設が決定し、沿線は喜びに沸きかえった。

工事は大正十年に始まり、西舞鶴ー宮津間が大正十三年、峰山までが十四年、網野までが大正十五年、久美浜までが昭和六年に完成し、昭和八年やっと西舞鶴ー豊岡間の全線が開通し、それまでの名称峰山線を宮津線と改称した。

この工事は関東大震災の後だけに、駅舎の耐震にも気を配ったため、昭和二年の丹後大震災に峰山駅舎はびくともしなかった。宮津線の開通は丹後縮緬業界の飛躍をもたらした。それまでは、京都へ行くには由良まで人力車、由良から舞鶴まで船、それから汽車に乗り継いでいた。しかしこれ以後は、縮緬は全て汽車で運ばれ、峰山、網野には織屋が増え、沿線に問屋がぞくぞく生まれた。そして丹後縮緬の全盛期を迎えることになる。

（北丹鉄道以下は次回）

丹波、丹後鉄道敷設経過図



私にとっての横濱―〝港の見える丘〟

濱野路　大森　孝

今回は『山手』（根岸線）で下りることにした。娘が飯島から本郷台駅まで『江ノ電』の定期バスを使ったので、昭和五十七年以来二度目の『山手』駅である。（旧姓玉垣倫子さんの孫娘さんが、フェリス女学院高等部・中学部へ通学するために利用されている駅が『山手駅』とか、平成十五年三月二十一日に話を伺っていた。―現在は藤井倫子さん）

平成十六年三月二十七日、もう午前十一時に降り立って、立野小学校北側崖の櫻は花が開いていた。お天気は晴れて、暖かくなりそうだった。花見も兼ねていたので、櫻の開花には気を止めていたが、主要な目標は『港の見える丘公園』の眺望を妻に見せることであって、櫻の花は帰り道で『谷戸坂』に少し咲いていればいいと思っていた。それに妻と娘と二人家族連れだったので、少しためらったが、平面を行くことにして（斜面の坂道を登って山手本通りの尾根の道へ出ないで）『大和町通り』をえらんだ。ところが『山手本通り』と平行して海に向かって走っているとばかり頭に思い描いていた街並みが、あにはからんや広い『本牧通り』となって、益々山手本通りから隔たりができて大慌てー。汗かきながら『妙香寺前交叉点』へ辿りついた時は正午を廻っていた。思わぬ手間をとってしまった。

石川町駅で降りて、『ブラフ18番館』へ登る。いつもの坂道を選べば、急ぎの際は無難だったのにと後悔した。女達に愚痴られ乍ら、階段状の細い迂回路を行きつ、戻りつし乍らも、それでもやっと元町小学校の正門へ出た時はほっとした。もう急がねばならないので、汐汲坂を後へ戻って、フェリス女学院高等部や山手カトリック教会を妻に見せることはできぬ。初めての『港の見える丘』見学の人には悪いが、元町公園で、昼食を摂らねばならぬ。偶々『エリスマン邸』の前の櫻が三分咲きで、大きな樹で、あたりにさしかけていたので、その樹陰のベンチで弁当をひろげた。見渡すと、公園内は土曜日の昼下がりということで、幼児をのせた手押しの車が右往左往する。

元町公園で、久しぶりの落ち着いた気分に浸っていると、夫君が背の高い、白人の一家族がやって来た。『山手エリア』は横浜特有のものだなと思う。同じ港町であっても、このての高台は神戸にはなく、ロケーションの味わいも神戸とは大きく違う。

ところで、私の思春期後期を不安の中で支えてくれた歌謡曲の『港の見える丘』……それをうたったとされる場所が、すぐ近くの谷戸坂を登って、『横浜市イギリス館』(通じる道の先の高台にある。今はすっかり整備されて、大仏次郎記念館も立派に建ち、〝丘公園〟入り口右手には〝バラ園〟もしつらえられている。(Rose)

始めて私がここへ昭和六十一年にたづねてきて、(自分の〝青春彷徨〟の迷いの時期に生きることへのエールを送ってくれた)歌謡曲にうたわれていた櫻の木はどこにあるのかと愚直にも一途に探しまわったものだ。件の樹を確かめたかった。公園から『フランス領事館跡』へ降りる、『フランス山』の入り口にくねったような櫻の手頃な樹があって、これを歌謡の中のモデルと独り勝手に思い込んだりしていた。もとより『KKRポートヒル横浜』の高台の麓に設けられた『港が見える丘』の石の碑はなかった。(碑は平成十一年に設置)。

港が見える丘(歌詞)

貴女とふたりで来た丘は
港が見える丘
色褪せた櫻　ただ一つ
淋しく咲いていた
船の汽笛　咽び泣けば
チラリ　ホロリと花片
貴女と私に降りかかる
春の午後でした。

(但し、一番である)

この昭和二十二年うたい出された歌はラジオ歌謡。私は敗戦後一年経って、広島県の田舎の村で(乃美尾村)期待と志望の高等師範学校の生活を始め出していた。元海軍衛生学校の施設での勉学。不器用な専門学校生にとって、萎える心、その不安な隙の惑いに、なにか安堵の思いを与えてくれた。ほっとさせてくれた(初めにうたった平野愛子は知らないが、菅原都々子の歌で馴染んだような気がする)

こうした宝物の歌詞を石碑から写しとっていると、娘がその様子をスナップしていた。私の姿がみかげ石の表面にまるで鏡のように鮮明に映っていた。

娘が昭和六十一年戸塚区汲沢に綱島から引っ越してから、現在迄の約二十年の長きに亘って、私の『港の見える丘』公園への、自分の青春を訪ねる旅は続いている。

このように、この公園一帯は、多感な青春時代に馴染んだ流行歌の懐かしい曲と共に、去り難い場所である。戦後を思い出させ、若気一途に生き、社会人として懸命に挑戦して行った、自分の十八才から十九才を拾いあげにきている想いがする。

(平成十六年五月十日)

由良の地名　その十

小谷一郎

此処で、曽祢好忠の和歌に目を通してみる必要があると思いました。それで、平安鎌倉私家集(岩波版「日本古典文学大系本」)所収「好忠集」を取り上げます。これに収められた歌は全部で五八三首でした。その校注を担当しておられる松田武夫氏は、

(四〇九)由良のとを渡る舟
人かぢを絶え行方も知らぬ恋
の道かな

の頭注で、「由良の戸」について、

「由良の瀬戸。和歌山県の由良海峡」

としておられます。この由良の瀬戸こそが、淡路の由良から見た「紀伊の友ヶ島との間の海」

であります。これが淡路の由良で見る由良の瀬戸であります。淡路では、そう言い表してきた歴史があったのです。併し、丹後の場合、天保年間（一八三〇～四四）賀茂季鷹の書いた「由良の戸」の碑文があるのが唯一の史料であったのです。それも、季鷹が、若狭（現福井県の一部）の小浜から由良の沖の海で経験した、一度の舟旅で、それも「やすらに渡る」舟旅で、好忠の「由良の戸」の歌を憶い、好忠が丹後掾であったことと思い合わせて、この歌の由良の戸こそは、丹後の由良であったに違いないと想い到ったということだったのです。しかし、この丹後の由良の地に「由良の戸」という表現をした史料はありませんし、好忠の丹後下国の事実をあとづける記録も伝承もないのです。

丹後地方の近世の地誌「宮津府志」のとりあげられている名所のうちに、好忠の歌が誌されていますが、それは、由良の戸の歌ではなく、天の橋立の内外の浜を詠った

よさの海内外の浜は浦さびて
浮世を渡る天のはし立

がありますが、この歌の詞書がつけられています。それは、

円融院御子の日に召なくて参りてさいなまれて又の日奉りける

というものです。この詞書の内容と符号する記録があります。それは

「円融院のむらさいのの、子の日の、曽祢好忠いかに侍ける事ぞといへば……（中略）……かくろへにて優なる哥をよみいださんだにいと無礼に侍べるべき。ことに、座にただつきにつきたりし、あさましく侍りしことぞかし。……（中略）……ひきたてよとをきてさせ給しは。……（中略）……けしうはあらぬ哥よみなれど、からうおとりにしことぞかしと（岩波文庫版「大鏡」）

（現代語訳）

「丹融上皇が紫野で子の日のご遊楽をなされた当日の曽祢好忠の事件というのは……（中略）……物陰にかくれていて、勅題をぬすみ聞きし、優れた和歌を詠み出すというようなことでさえ、たいへん無礼なことでしょう。それを好忠は、ことさら、お召しの歌人の座に強引にずかずかと着席したのですから、言語道断のことでしたよ。……（中略）……その者を連れ出せとお指図なさいましたのは……（中略）……いくら歌が上手でも、時と場合を考えて詠むべきことです。この人も相当な歌人ではありますが、こんなところはひどく低劣なことでした。（講談社学術文庫版　保坂弘司著「現代語訳　大鏡」）

というのです。子の日の行事が催された席へ曽祢好忠が召されもしないのに出席し、人びとからとがめられ、侮辱されたということになっています。ところが、一方で、「後小野宮右大臣寛和元年二月十三日記云。今日院御子日也。召和歌人於御前。兼盛朝臣。時文朝臣。元輔眞人。曽祢好忠。中原重節等也。公卿祢指召。追出好忠重節等。時二通云。好忠己在召人内云々。」（群書類従本「中古歌仙三十六人伝」）訓み下し文「後の小野宮右大臣、寛和元年二月十三日記に云う。今日は院の御子（ね）の日なり。和歌の人を御前に召す。兼盛朝臣。時文朝臣。元輔眞人。曽祢好忠。中原重節等也。公卿、指したる召無しと称し、好忠重節等を追出さんとす。時に通に云う。好忠すでに召人の内にあり。云々。」ということです。これでは「召しなくて」と詞書に記したのは、一体誰だったのですか。詞書は好忠が自ら書いたのではなく、後に編集した人物が書いたので

はないかとさえ思えるのです。集中の歌に詠み込まれている地名は

全歌の数　五八三首
地名の数　九九所
（地名を詠みこんだ歌の数　一一二首）

もありますが、殆どの場合、詞書を施していないためその場所を明らかにできない地名もあります。その範囲も遠くは、宮城野・安積・岩代・阿武隈という東北にまで及んでいます。勿論、歌枕として詠みこんだものが殆どで、その土地を訪れて詠んだものであったと思われます。能因法師が、都に居て、

都をば霞とともにいでしかど
秋風ぞ吹く白河の関

という歌を詠み、自分でも気に入ったので家に篭もり、肌をやいて、秋になって旅から帰った風をよそってこの歌を披露したといわれることがあり、後の世まで話の材となった例があるように、歌枕の地は、歌を詠む上のよりどころとされ、都での歌合わせの題に合わせてとりあげられるというものでした。そして、好忠は和歌を詠む上で、地名をよすがにして巧みの才能を発揮したので、自ら歌に詞書をつけることはしなかったのだろうと思います。

次にふれておきたい歌があります。

（四三八）
草繁み伏見の里は荒れぬらし
ここにわが世の久に経ぬれば

この歌に「ここ」という表現があります。これは、普通には「此処」であろうと解されます。この語は「話し手が、これとさし示すことのできる範囲の場所」であり、「自分の今いる場所」（「広辞苑」参照）であり、「話し手に最も近い所を示す語」であり、「この場所」（旺文社版「古語辞典」参照）と夫れぞれ説明されています。好忠は、この歌を詠んだとき、一体、何処にいたのでしょうか。詞書で詠者が書いて表さなければ、正確なことは分からないのです。それに、その頭注には「ここに―丹後国（京都府）」と記されています。校注者の松田武夫氏の思い入れも分かりますが、これは余りにも範囲を越えた気がします。此処は、空間的にも時間的にも限定される重要な意味をもつ所である時なのです。もっと大事に考えてほしいものです。

（五六一）
たごの浦のまつり事人百敷の
選びに入りてなれるなるべし

の頭注を見ても、少しその気がするのです。駿河（現静岡県の一部）の田子の浦は、万葉以来の歌枕の地であったのにです。

（平一六・五・二四）

四方先生写真集出版記念を祝う会

編集後記

みどりの日、由良岳登山は今年の盛会でした。地区外からの参加者の声「今年は登山道が広く刈ってあり良かった」。

いつもながら観光協会由良支部に感謝　。

今回から田中貞彦さんの、「シベリアの思い出」が載ります。平和のありがたさや人の暖かさを感じます。

国民宿舎へ通じる道沿いに今年も睡蓮の花が咲いています。

もみじ公園の大きな土手にもつつじの花が満開になればと想像しています。

まちづくりは多くの人の参加が必要であり継続が大切です。

由良地区公民館は四月から新役員を迎えスタートしました。

地区の皆さん、ご協力をよろしくお願いいたします。

（飯澤）

R100 古紙配合率100%再生紙を使用しています。